

# 徳川幕府への畏怖と反骨を共有？ 百万石の意地と公家のプライドで文化を牽引した二都

加賀藩

江戸幕府

京都



## 初代 前田利家

1538-1599

出身は尾張。秀吉とともに信長に仕え、信長没後は秀吉の天下統一を支えて加賀百万石の礎を築く。能や茶の湯を愛した“カブキ者”。

## 金沢城は百万石の美城

1583年の利家入城以来、加賀藩主の居城として百万石の繁栄を見届けた。剛より美を極めた石垣、海鼠壁、鉛瓦は必見。→詳細はp14



## 2代 利長

1562-1614

利家の長男。秀吉に仕え、五大老のポストにも就くが、五大老筆頭の家康ににらまれ、前田家存続に奔走する。



## 5代 綱紀

1643-1724

学問を好み、藩内にも奨励。「加賀は天下の書府」と称されるほど、古書収集にも尽くした。

## 12代 斉広

1782-1824

現在兼六園のある所に部屋数200の巨大御殿を建設。だが、完成2年後に42歳で他界。



## 13代 斉泰

1811-1884

斉広の長男。父没後、巨大御殿を取り壊し、跡地に庭園を整備。ほぼ現在の兼六園の形を作る。妻は徳川11代将軍家斉の娘・浴姫。



## 兼六園は金沢のシンボルパーク

通りを挟んで金沢城の隣にある。岡山の後楽園、水戸の偕楽園とともに日本3名園と称され、金沢の顔ともいえる庭。→詳細はp20

## 「武より文」で存続を図る

外様大名のなかで石高最大。財力のある前田家の謀反を警戒する幕府に対し、代々の藩主は将軍家との姻戚関係強化と「武より文」の政策で和睦。ついには徳川御三家と同等の格を勝ち取る。

## 加賀 前田家

## 友

禅、和菓子、蒔絵に象徴。

金沢には加賀百万石の時代から続く独自の伝統文化がある。

能や茶の湯も盛ん。こうした文化風土を育んだのは、歴代の加賀藩主による「武より文」の政策だ。

石高最大の外様大名である前田家は、徳川幕府にとって目障りな存在でもあり、さまざまな理由を付けては取りつぶしの機を狙っていた。これに対し、「謀反を起こす気などさらさないことを示すために、加賀藩はその財力を文化・学問の振興につぎ込んだのです」と、戦国史が専門の静岡大学名誉教授、小和田哲男さんは言う。

力をそぐため無理難題を突きつける幕府。幕府に対して苦々しい思いを抱えていたのは京の朝廷も同じだ。「禁中並公家諸法度で政治的地位を剥奪され、領地も10万石程度。公家のなかには、和歌や蹴鞠を教えずにわずかな授業料をもらい、生計の足しにしていた人もい

歴史をひもとくと意外なつながりがあった

# 金沢と京都の深い関係

平安の昔から都として栄え、雅な文化が今に息づく京都。一方の金沢は、江戸時代に百万石の財力を文化振興に惜しみなく注いだ。加賀藩の城下町。公家と武家、帝都と地方都市。一見すると対照的だが、実は意外な交流と共通点があった。

文／大旗規子 イラスト／伊野孝行

# 江戸 徳川幕府

## 統制と姻戚関係で政権強化

政治に意欲を見せる朝廷を、禁中並公家諸法度で牽制。諸大名に対しても、幕府転覆の芽を摘むため監視と姻戚関係の強化を進めた。そのかいもあって徳川幕府は260年余にわたり政権を維持。太平の世はさまざまな文化を開花させた。

初代  
とくがわいえやす  
**徳川家康**  
1542-1616

利家とともに豊田家五家老を務め、秀吉没後、政権を奪取。「たぬき」ともいわれるが、本好きで文化・文芸を庶民にも奨励した。



ひでただ  
**2代 秀忠**  
1579-1632

家康の三男。統制強化のため、多くの外様大名をリストラ。朝廷への締めつけを強めた。

秀忠の娘  
たまひめこし  
珠姫輿入れ



京都に  
別邸を築く

往時の御殿が残る二条城

二条城は家康が京都御所の近くに造営した別邸。規模こそ小さいが、造りは豪華。必見は当時のまま残る二の丸御殿。→詳細はp14



ごようぜいてんのう  
**後陽成天皇**  
1571-1617

秀吉の天下統一から江戸開幕期に在位。後継に弟・智仁親王を望むが家康に反対される。

親子



## 寛永文化サロン

宮廷文化の復興目指し文化人が集う

江戸で興隆する武家中心の儒教文化に対抗し、京では戦乱で衰退した宮廷文化を復興すべくさまざまな階層の文化人が集い、サロンを形成。その中心にいたのが後水尾天皇。小堀遠州、千宗旦、本阿弥光悦、俵屋宗達、狩野探幽など顔ぶれも超豪華。

こみずのおてんのう  
**後水尾天皇**  
1596-1680

父・後陽成天皇から皇位を継ぐも、幕府の横暴に反発。勝手に次女に譲位。以後4代の天皇の後見人として院政を行う。84歳の長寿皇。

兄弟

はちじょうのみやとしひとしんのう  
**八条宮智仁親王**  
1579-1629

次期皇太子として秀吉の養子になるも頓挫。皇位継承の道も断たれた不運の人。和歌・連歌など古典文学に精通し、自ら造営した桂離宮も歌会の舞台となった。

親子

はちじょうのみやとしただしんのう  
**八条宮智忠親王**  
1619-1662

父が没して荒廃した桂離宮を増改築。天下の名園を築く。資金を出したのは妻方の前田家。

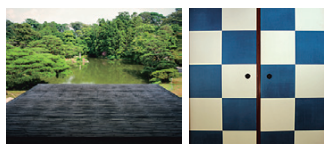
## 京都 朝廷

幕府の締めつけに反発

禁中並公家諸法度によって政治介入の道を封じられ、収入源も制限される。江戸時代の朝廷領は3万石、公家所領を合わせても10万石程度。台所はかなり苦しく、多くの公家は先祖伝来の書や華道、和歌を教えて生計を立てた。

公武を取り持った？ 桂離宮

桂離宮には公武の要人が幾度も足を運んだ。離宮の主は水面下で朝幕の融合を図った？ 茶室・松琴亭の襖紙は加賀奉書。→詳細はp18



利常の娘  
ようひめ  
富姫輿入れ

パトロンとして  
文化活動を支援

「一方の加賀藩は、『武より文』への投資こそが前田家存続の鍵。財源は豊富。寛永期には加賀藩がスポンサーとなって京の芸術ムーブメントを支え、その縁で利常は狩野探幽や俵屋宗達、宝生太夫から蒔絵や象嵌の名工まで、数々の一流アーティストを加賀に招いた。文化に情熱を傾けた『トップ』に刺激を受けて、『商家の旦那衆や職人も茶の湯や芸事をたしなみ、町全体でそれぞれ独自の美意識を育んでいったという点も『都共通』と小和田さん。こうした裾野の広がりがあったからこそ、金沢も京都も現在まで伝統文化がしっかりと根づいているのだ。」

「また」(小和田さん)。  
特に境遇が似ているのは、江戸初期の天皇、後水尾天皇と3代加賀藩主の利常だ。どちらも幕府との軋轢で苦汁をなめ、その求めに応じて家康の孫をめぐっている。「徳川家と姻戚関係を結ぶことで身を守るしかなかったのでしょう」。苦しかった朝廷、危なかった前田家——。両者は文化を巡る利害でも一致した。

京都には、長い歴史のなかで培われた雅な文化がある。財政は厳しいものの、文化的権威を保つため王朝文化の復興に力を注いでいた。その中心にいたのが後水尾天皇である。